



清文集
前編
三

14
3157
15(2t)



14
3157
15
(25)

淡々文集卷之三

目録

- 一 田九郎玄満子婿の酒徒評
- 二 守氏玄等の奥書
- 三 春棠窓の詠
- 四 雑詠 十二章
- 五 病中倦夜
- 六 挽詞 竿杖、をす
- 七 青錦堂の祀并道行
- 八 幸化ふきりたる文

文集三目二

九 流斜之人、く子紙

十 其舟より其素を擲る事

十一 其泉の源より先考体計

五 庭三忘のこゝろ

十二 白拍子能信償

十三 大圭碑文の文

十四 間脈乃こゝろ

十五 頼光綱子令れを返す画の償

十六 檜八のきし竹の文

十七 檜雪くこゝろ

十八 武陽渭少くを不

十九 阿保段の画の償

二十 七世孫の跡の修文

廿一 報信四章 并、吾答

廿二 十七回小絶る文句

廿三 勸学子歌

廿四 嗅洞亭小絶る文

廿五 戸田氏三回忌集之席

廿六 妻小おろける人の許へ了る

廿七 林外老人へ贈る年賀

廿八 後東亭

廿九 野人へはらうに

三十 小舟を天神寺納の渡

十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十



第一 佃村九席云湯不禱る

酒徳禱

老人あり雲衣葛幕トガリふし雨月をを結し堤
をたし席中を花を我あふ。心の如く小胡夕を
所を治世の中乃治を家とのなり。武功の余光を頂
き子孫の口ををわくはた海うらた。年くくけはて
ち乃ハ法より田乃里の喜秋をメて志如と屋位。
起ると看之。夜をえたら又看む。解時ハ川風平吹
きさひきは静よ魚我のふ。さの法きめくくさ家
獨乃夕アハき如を脱き是ををよして石船く燈

古記云
つきたく
指のる
五郎書
佃ツクリタ

朝う子波移くんぬれ人折あへて茶碗を出す。
 此のしぬをこるとよまこひ散るかいらを教ま三
 盃と又六盃をみ流う強ひて作うて笑て。神
 風乃いさらよく曲くぬんう。君子れ道も佛の教
 も心裏おの流うて傳うてむ。誠平阿うてさ老
 乃破ひ

おといよ
 田のこて
 んまやふ

心をやろりあふ志うめやま

雪實ううぬ人のこのまゝ老人のうへさう。劉
 伯倫^{ヤロモチ}掛を左衣の味方と形して程確を又看む。
 一人は白丸うまるとのふ志く相そなた



才二 守武志守之真書

六波羅密寺のむとりよとんき出とつ不済あり。常に古
 人乃学れ癖をそんへ世に傳うて古人の巻をあふ
 いた事。間平後と入也。人以老我秘伝。ち本の小
 武紙より平あふををうて室とてそとてあは
 予乞我屋あえ巻一列ととと第一時るる
 今角倉乃文庫ふと傳う。西本のううて傳のそは
 ちりそりけさ。武士乃んもわうて屋き一物くきうと
 才時之庵法々

才三 春崇へ遠ス窓の銘

高川北窓下
陶器語之

高川北窓下。自謂義皇上人と。清風の来きるす
嘯きくそひく蒼蒼拂くそけむ。後人陶窓

と呼てうやみうやむ。羨まざるもの今日至き。

飛簾孔
窓ノ名ナリ

屋上子飛簾孔を云む別あり。天地怒る時吹

怒於土囊之
口風賦

草花葉のゆるかき。地洞不きくおくと。甘夏の死を

名れぬくた日も吹。流れてぬる夕暮れ吹く。ひらぬ

しく日高き夏乃氣をよさんとぬきききききき。

よさんと氣ふとのふおとへん涼しかり。忽お夏の

日乃氣をよし是哉又して夏日子遊ふを春棠之屋

卵窓と存るよものを作り日く故人を能く称く

屋卵窓ハ
屋根ヲ切キ

窓ヲ明ナク
新ニ号ク

その花

涼しさの富貴を来しう松乃存

昔了ゆり志我幸す

才四雜話

一蒼顔す又字を教へる。猶今飛来して一字もよ。

む事ゆると別もの邪をよして飛去んへ。手録も

先祖を飛来するを遊く手録れ文字細工を移りく。ゆ

日すすす和漢おもる子の自中を感し。墨之哉稱

てそ道す日我空しくせり者八眉を擧めて能きと存く。能

とも風雅のれをひ深うく如人の手録を顔すも。片お

ふもつたなきも也。自悟をいひあつて守るべくは
 一。同以謝、辱、画とすへ一なといへば、侍輔もその類、兼
 好もよあし拙なうと云はし、其すともた非弁うるといふ。
 侍人よま時危す、字、田、おの事、あつて、辱、道、咄、し、其、用、の
 事と笑ふ、予、之、非、也。重、漢、先生、之、能、書、の、名、有、人、
 なり、一、う、予、う、書、う、う、の、を、見、て、今、て、下、れ、名、字、は、
 也、又、ま、二、初、の、侍、能、凡、ん、その、う、へ、一、字、と、を、能、一、ん、と、か
 も、又、ま、の、道、理、を、一、一、と、を、あ、る、と、さ、る、の、明、も、有、じ。
 流、辱、画、を、を、見、て、甚、怒、ふ、一、や、大、笑、あ、り、う、う、長、夜、
 腹、淋、一、く、厨、飯、あ、り、や、や、ア、僕、云、有、り、何、う、菜、有、ん、と

ア、有、う、云、何、う、と、何、九、年、母、三、つ、あ、り、と、云、世、を、
 予、う、も、お、と、け、う、と、又、大、笑

一、東、坡、の、信、の、二、ま、も、宗、達、の、画、一、も、晴、ふ、あ、ひ、う、う、と、云

一、光、悦、生、涯、の、心、言、た、と、甲、斐、國、身、延、山、長、廊、下、れ、新、口、の
 額、予、て、お、と、い、志、う、れ、う、通、長、ノ、二、字、あ、り、

一、名、ふ、何、の、道、を、と、う、や、う、と、進、磨、大、海、予、て、お、り、
 九、年、面、壁、と、て、名、名、僧、和、漢、お、も、習、ち、う、何、像、哉
 念、一、う、思、案、大、悟、の、神、九、年、の、月、壁、ふ、む、ひ、て、尻、を、腐
 ら、一、悟、う、う、う、と、云、て、不、善、用、を、と、云、と、九、念、面、壁、於、
 死、ん、と、念、一、念、而、悟、也、法、禪、一、二、三、と、念、一、て、二、念、ふ、り、

と榮華此情なき教乃要主也一棧九念して向ふ所ハ
 破ふても窓ふても窓ふても栢樹子ても海も山もゆゆ基
 時の心の的なきをさるゝ二種の的を捨て教年喟々を築
 を放されう又昔の家の像として其のまよふまよふを連
 戸月痛きお柳をよき思ふ孤舟の一名也川上の観念
 淋不見性成仏天國の虚名なるん澤庵も其思ふ
 瀆す。至處難信とは言ふ老れ心裏をよく徹りたる
 ん古賢禪師海下光也の遺言を責むるありて其事人
 一昔義士有り其妻の持する扇として骨をなすり掛おきて
 秘藏きしを足傳ふおつとの手紙よく 同くゆゆ絶つぬ

古賢南紀
 人の海印光
 ヲ作

おとこひはありまろりともまろりこれ世も何き哉その比乃
 日く切も方へた事之切方る心を感し一傳りたり
 一英一棟のまろり流る水の流るるとりよ大笠をまろり場
 と此跡^{カクキ}指す所の後不^{カクキ}禪賢を言て云人あり予云きハめて柳
 一本寺源久んとつて燈ふを子つりたり一ん道と道のへお
 清水流るの西の流るなり時ふき事ありと下御玉若
 神と云ふなり今も柳あり古跡と云。新柳の時足傳りたり
 燈ふはん年終る可の心ハいつ、まありや、東北刊と云と土佐家
 へ伝せはさんり是と。昔杉戸の流るり梅庵をかきしる信
 女を事事ありや、答ありたりと思て此事なりと云る

折草あふふ土佐家の名へもたふささるるり仍て贅の
 事取アラス 通の人は清水流く柳陰志りん
 ことまゆりつぎ 獨行潭底影。數息樹邊身
 賈嶋く自愧の句ふけへて通の入り奇と形な今り
 あり

一いつのはえ声時度へあはるる女の文仕おほりして
 こと勢冲動て放へゆの時御餘ともいつと奥あきて
 の方名をりあつぎ。をきよせはけありいれん女と
 扱は志るりしてとをやあ、お御めらんおひくまて二年
 をまるとりつぎとアとくるやを心育るるちの女なりりり

八

一秦を信する人云秦ハ二つ並カせて折おきいりやうお
 御を並べても三百番の外なり二つ並てら六千番を
 已先互先を報つりりこ一方量形一思りいり不倫能事之
 とそかく云一人あり又其不と云云論あり津之世下の事
 一振物おまうてあ一度と流逆く秤舟のころをふアと
 る人あり當時秦アおめりハ仙ト也是も對するとの
 宗通の流傳言名を是も等一とやさねらり仙トお
 治さるても不暇又ねらりても後もくは其境の遠
 ひくらくへりのなり風雅の上も黑白をちまらふふる
 ことのりありし秦と一人の上子を捨てん其極也

日更時々も本とわたりて下守二三とくわらぬ
風雅の務者まくらたよらるゝおあつゝ一其人を
壓千人を感ぢりてもわらふ神うさし下も一家者
儀をさく上もやと遠くをせたりひくして月雪花杜宇
をさけしみつゝも身を忘るゝものなり上も必衆
口金をさくしけり下近しそ道が就してはくはく
時と牧業の書したるごとく回ふ髪や容を白をくら
黒を退ふを早し人なるをさくあまらけり上も雅
の中さふあつて神意す叶ひ鬼神を感ぢり也病
魔を退き雨を祈り名を以て関を通り悪夢を払

ふ気は神意す叶ふ然るへ一故ら神子の有る心配
氣子配すふ配まへん静之す去態のつらまへんあつて風雅
ハ家と氣のかうちふ空心有意をむすひつゝめ氣と心は
たうひひく務時を佳句とかり心と氣相和つて地
乃句と氣の也心ふ氣の中けり時をあらわす句と氣
也此ふすそふあつて相を下もとさへ一祿の舎儀
を心けりへ一是も上も下もあり
一昔はま屋の大き上流の時さくつゝのあ
いつゝ一頁ふつをみし花のまわしつゝ
まんびりいり桶とぢの花

此一事一具其古きあり略す

一 孟教小引日 桐花あやめ 七夕 菊子

四季の是つみと云 侍ると云 花をぬと云 孟
教を月見小引の御城之御能を物々骨の受小
巖作并て正しく委枕上より立をまひ孟つみ
一画より孟の裡よりおひきなりと見て表ハ明りり感
くして一子も忘る日甚孟教を打たれた甚御
機嫌すれぬい何と云 孟教を尋ねり何と御上意
よてありし時此表夢の中よりおひきなりと上
くく花をとりて之紫屋への上彼ふきんをみる

と此表孟つみの返メハハハとこつまわりと
花主ぬを當てふ上侍るより一気ふよつて幸
く家小巖作并て孟尊を今も不絶已徳急
らんと云一名に紫重物と云より一月をそ哥
お心をよきしとの之礼教を必風雅お心なくて
叶ふ事しき事也 餘の文候わりすしてを舞
もくもあもくやも形心つらぬれんれ
は通知する事ありし昔一老人の夜話有
一宰相晝寝子曰朽木不可雕也 下器より上器
をこれとてさちとす 呵アおーと云ふといひ

りか
その学老の息をめてり。序より合せさうく日本の
道理を通りて家々の事よりくまたひとまへ
後と不源氏にてふをなを能く吞込へん皆つら
ぬへ一筆予畫いぬらうくくといひの事みよか
うけとま子の不様始るつきてあさう色未描
花の夜想す夕うかの事をきりてたりとま
れあうさまといとさうく何うさまといくくや何處
もくといひてよむ心也程の字心をとむへ一筆か
の事を始りて遠き圃中をみ教るもいひの
事なりといひ是又ひよの事を人く能くさうとい

論証
筆解

源氏を金瓶梅のこゝとハ一筆予源氏の道理を
明あうさうく「や」といふ神も衣と云ふんかうさ
つものそれとなつたを次は源氏をいふ
此よりふて其相語の大切なる事ハ明か人押して
日本に事の中く漸くのち又韓退之云案
予畫寢奢侈を憎むの語なりん畫少畫也混
雜く事ん

第五病中倦夜

わしは切ふ老婦時夜々病を打ゆきまらね
し。さうともやと倒して今ある事乃やうまう

世の中をさうくみ侍りて多岐志の阿婆やと後程可
一書を故より

後乃世をかきけりとも一くそ

あゝ如旅より小東の中一山

漏る沈む瀉。障あり絶又聴。東窓未生白。枕上
一灯青。右雲溪先生病中侍疾之吟。時今思不
出也

良薬甲、病魔を遁折小時

ふし生く何をす風上世ぞ存

障絶窓志らく灯空一

才六挽詞竿秋へをス

父存在乃時、立ちあがりて不坐り。法をつて、
之をあせりて我孝とをあり。孝は法か不法は、平ハ
泣きを地は、はるぬき天をあふく。母は孝子事^{ツコラフ}ふれ一
也。なとして、このつ子信有ハ常にして。若とわたりて
ハ信の端。その端のは、あきあり。然る平位きを、あ
るは信ありて、其信信ふり、されハ又其其端、あ
や。その端、あきふるを、のへ面^シなおとも、に、其端あり
信を、端、あきふるに、似たり。只ん乃、ふ、其端、あき、
く、それ人を、あき、はる、に、其家を、織、て、其必信、あき、と

謂ん

欽哉叔子ハクセ私人と家

チ七 雪 露 堂

雪 露 堂 雪 露 堂 者 静 山 別 業 也 七 年 未 終 掃 江 南
批 露 塔 置 後 苑

堂 上 之 名 家 詩 大 家 及 大 禪 師 律 師 各 文 章 蘇 哥
著 術 内 此 冬 需 二 應 一 文 章 未 不

道 如 塔 露 屋 庄 在 山 之 高 露 雪 露 堂

と 五 重 之 露 塔 道 行

堂 下 之 堂 第 二 下 之 堂 名 之 立 能 塔 乃 露 雪 堂 也
如 露 塔 露 雪 堂 之 露 雪 堂 也 乃 露 雪 堂 也

歌 吹 海 陸 務 親 治 之 八 撥 在 之 海 乃 吹 之 海 乃 吹 之 海

度 稽 點 滴 加 琴 紀 御 之 奇 吹 之 海 乃 吹 之 海 乃 吹 之 海

憶 在 錦 城 根 之 之 之 渡 川 乃 吹 之 海 乃 吹 之 海 乃 吹 之 海

柘舟 詩

汎 被 柘 舟

荇 菜 詩

見 說 秘 苑 抄

石 凝 姥 日 本 記

石 凝 姥 乃 治 工

探 天 香 山 五 金 作 日 本 記

記

和 以 之 言 共 寺 物 矣 之 言 一 丈 余 之 言 八 地 之 言 乃 吹 之 海 乃 吹 之 海
氣 核 之 言 乃 吹 之 海 乃 吹 之 海 乃 吹 之 海 乃 吹 之 海

物理論

欽哉

欽哉

薜荔以下

客醉時

江ノ賊

恋まねの石

常盤

其茶を推き

孤向を破る

其茶を推き

夫子出

まゝ常子おまゝとの香竹ハ刈。薜荔薇薜薜。

榛栗ーアあゝいゝ榛栗桐梓漆乃滴を載こさる。ままをれれを

恋まねまねの石を推き。ままの代乃常盤能付乙女の神を

いかたつつむとこの神のお七年乃漏々る。石の雨

ふくかまさく石を推き。石を推き。石を推き。石を推き。

母の石を推き。石を推き。石を推き。石を推き。

孤向を破る。石を推き。石を推き。石を推き。

其茶を推き。石を推き。石を推き。石を推き。

夫子出。石を推き。石を推き。石を推き。

小且指石の鼓ハ碑石。石を推き。石を推き。石を推き。

且指詩

石の鼓ハ

石鼓ハ

石鼓ハ

石鼓ハ

石鼓ハ

石鼓ハ

石鼓ハ

石鼓ハ

石鼓ハ

石鼓ハ

石鼓ハ

石鼓ハ

石鼓ハ

ハ石鼓ハの口はくひあ。石を推き。石を推き。

石鼓ハ。石鼓ハ。石鼓ハ。石鼓ハ。

石鼓ハ。石鼓ハ。石鼓ハ。石鼓ハ。

石鼓ハ。石鼓ハ。石鼓ハ。石鼓ハ。

石鼓ハ。石鼓ハ。石鼓ハ。石鼓ハ。

石鼓ハ。石鼓ハ。石鼓ハ。石鼓ハ。

石鼓ハ。石鼓ハ。石鼓ハ。石鼓ハ。

石鼓ハ。石鼓ハ。石鼓ハ。石鼓ハ。

石鼓ハ。石鼓ハ。石鼓ハ。石鼓ハ。

石鼓ハ。石鼓ハ。石鼓ハ。石鼓ハ。

石鼓ハ。石鼓ハ。石鼓ハ。石鼓ハ。

石鼓ハ。石鼓ハ。石鼓ハ。石鼓ハ。

石鼓ハ。石鼓ハ。石鼓ハ。石鼓ハ。

石鼓ハ。石鼓ハ。石鼓ハ。石鼓ハ。

石鼓ハ。石鼓ハ。石鼓ハ。石鼓ハ。

石鼓ハ。石鼓ハ。石鼓ハ。石鼓ハ。

石鼓ハ。石鼓ハ。石鼓ハ。石鼓ハ。

樹中の一僧

西林寺惠持禪師
本室三百歳
庐山志

此の僧。其是也のふ。師品一々。東風子嬉々

せきり。このふの。さきこふ。劉後持。師持の言

成下しを。其。陳留縣の樹中の一僧。三百歳後。其

聲を傳へて。生。滅を。語。又。去。一。塔。不言。笑。ハ。ハ。ハ。

ふ。八。年。光。乃。移。く。さ。り。拍。丸。曾。瑞。堂。苑。乃。遠。

物。將。相。不。至。く。富。貴。ふ。く。く。経。歌。子。就。り。永

叔。り。弟。友。動。く。セ。辭。を。か。す。も。い。う。く。今。此

靜。山。老。人。の。寶。と。亦。月。ハ。四。面。風。色。及。く。く

く。く。わ

其時庵淡く春下於是乎書

將相不至
仕官而將相而
源故脚 石起語

喜。て。こ。れ。を。去。
喜。為。天。下。道。也
於。是。乎。書。す
永。叔。直。錦。堂。記

廿八 幸化千世

語。と。あ。る。と。う。そ。れ。坊。之。乃。哉。用。た。ま。は。さ。る。の。ふ。お。も。い。
あ。し。て。亦。不。ハ。い。い。一。師。之。の。誓。不。た。り。く。ん。
み。他。の。れ。れ。の。う。く。と。な。く。日。教。を。い。は。れ。此。語。之。
昧。丹。之。窓。乃。雨。は。千。里。の。旅。を。ん。子。身。之。梅。樹。碎。
ノ。雲。ハ。い。と。亦。不。あ。り。つ。よ。割。古。キ。名。を。く。家。ハ。楊。花。
朽。く。く。ち。は。家。松。を。あ。か。香。か。り。た。く。ふ。ひ。あ。ま。は。れ。を。
を。を。道。乃。泣。を。い。う。て。は。信。す。あ。ん。と。風。雅。の。神。の。
福。なる。人。一。別。文。臺。ふ。せ。り。と。云。か。く。て。も。な。や。乃。
流。の。枝。と。も。一。橋。乃。流。風。を。は。り。財。を。れ。復。

誇

道の位
机心
其心
為家
其心
其心

散筆三

〇集

廿九 流斜主人とく手紙

牡丹小獅子一体に新志あり。前非皆汗。清風を待た
る。謝子。祥も早もくありあると。朝屋。委占。時
蹄とぞ。膝尼。洋尼。別。出。立。茶。懐。後。掃。府。と。平。昔。親。仁
と。ろ。ろ。く。の。文。志。余。り。面。白。氣。又。袖。子。隠。し。下。以。玩
先生へよりくく。中。て。なり。と。し。

廿一日

廿十 長舟より志業を請ふ書の時正なり

此。作。京。の。男。志。そ。く。く。手。よ。ろ。ろ。く。ね。ず。稿。書。八。回。下
あり。と。栢。子の。む。と。け。く。ま。ま。の。下。と。

書老のあまは甘く。腐り瓜

礼を治也。悪到て居也。人以歯を食て。手折を志
ら。き。世。人。熟。瓜。と。受。る。こ。の。患。く。石。瓜。以。之。一。
今。自。厚。志。深。う。く。を。飲。菫。や。り。か。く。て。粉。吹。して。下
附。

廿七 伊丹寒泉へ贈る書。表。先考体。斗。清。浄。余

年々之類也

わろろく。常。み。惻。として。武。陽。小。有。一。時。半。町。を。至
る。役。事。り。ぬ。吾。ふ。床。一。く。披。き。足。を。是。え。匂。あり。
杜。宇。そ。未。より。体。む。を。る。を。せ。り。

半町

改葬

廿七

句中留あり

轍士六昔々
泥定同シ

和章騎馬
似東以瓶
飲中八仙歌

三瓦両舎
妓ノ集ル施
舎ノ水滸傳

轍士疾のこしく歌む。汗足らざるふまハ船も乗らじ。
沈碎の一書くと独り。昔今三瓦両舎のなれ
来る松のそらハ朽くて。又あつとすまきて毎年回
しう。口十。ふと。と。あつた。ふた。と。出
る。家。と。ま。夜。より。と。ず。し。ら。ま。ら。せ。彼。柳。を。う。
そ。む。り。家。の。影。り。も。や。う。一。体。才。も。ま。あ。り。い。さ
け。う。い。の。の。ゆ。り。垣。根。も。と。と。ま。ふ。り。と。卯。の。花
の。あ。れ。た。る。り。ほ。く。き。の。一。百。千。ハ。無。何。り。り。
涙。と。醒。て。と。む。を。抱。き。守。付。を。下。お。ら。ぬ。花。の。の

ゆり垣根
後頼に懐紙
子名をま
名ヲ讀ム
こも也

目ぢめい
さノ

達人。今。誰。を。い。ら。う。唐。ん。や。時。己。ふ。ま。る。泉。流。き。ん
よ。春。の。道。を。畫。して。又。新。ふ。先。人。好。も。千。志。さ。う。ふ
一。節。月。日。の。昔。を。り。よ。ま。返。して。あ。ま。を。吞。声。を。放
て。と。ら。め。あ。る。さ。う。ひ。と。を。守。付。は。表。文。の。ち。り。ま。ま
泉

昔流らん画も回一むめのそらね

激ふれけのきこる。一。百。回。ハ。鏡。小。品。く。う。如。下。姉。一。草
も。白。ひ。て。子。孫。美。花。を。か。さ。ち。う。り。う。ま。い。め。一。へ。今。の
お。う。う。も。草。を。う。ら。ま。て。ハ。世。の。上。人。の。真。佛。も。其。の
れ。な。う。う。志。く。ぬ。お。の。借。成。う。ふ。尼。知。り。如。如。こ。控

志くぬおの
くうやまのめ
京祇自書讀
ま奇

心裡吹毛
禪語之

輝光
無極と云と
今月泉神
終り

よのへある心むけし。至って孝乃其の紫衣も

耳たやその凝るるを中しく動るる朝夕の心

書吹毛常々磨スの一機言く語く。徒小選一あなが

ちよ葉よ採ひて春日を其のねろりたうぬき

泉の風流。雪の環よ白花れ光りを流へて。彌同哉

破了。皇都を左りよ朽一思也なうく春秋を厚の

考くふともあひ家の日を算へ。泉流を置てくは

實客よ命し。書よ家。霜花けをけりて。概よそのふ

よ。炎風をそらふの寒泉別甘泉う。輝光眩

耀一厥福をくくす。くくはく長く極うたうい。

いづれと云
今月泉神
終り

中三白拍子之画讚

源のさねらほく一へゆあそんとてほりりたる耐石山

崎よ命うたをふけふもはあはとはとよみ侍てさ

一うぬてあうハ母をふへ

影くそ平陰一転きかからた雪乃也

下ノ白ハ

なにはあうれのうかしくん 志る女身

中三天主碑前之文

石を切石我運ひ。此却圭子り志家一を新よ

筑末さきさき。他善乃いとなまとも。鑑平羞鏡ぬ
さうひてつた乃志ふう。いふくかたた支まををう
ぬ作んたりや。さうさうまうそ老安や。さくと境あふ
む久ハ時の風朽あたらうまぬる。何となく神ぬま徒
事

おきひりけあさ名そまの玉かーハ

右葉月三日妙導招提子入る速く

才四 間脈^カまと葉 宿藏主

誰謂崔子角あー角あは牡丹花老人必塗ら
ん。胤小牙あー牙あうん。表うう援ん。通まう

費端
詩経

白羽ノ白
孟子

洞玄先生。新子花一各子花と六つれむ。噴を改む
ひ月ふりち梅を第ふ。ま白きる白玉の白。甲まき
らくとまきるとまの性平あつた白羽のふ子あつた
宿屋乃宿あり。邪老人乃。さやうれ外と若らぬあま
ま時庵のおうは。ハ甲子金粉を塗る掌中小愛ま。是
ハ唯四明と狂あり。通。亀を以酒平換とる。ま
四孔字を名法を布ま。持。引。口。人乃。罪。花。ハ。別
宿。花。と。呼。屋。

ゆり子なる磯乃岩屋なりとむる花を
いへや波がさうさうわう

と古人をよみたり。まほしく家深く稲音しく
神あり人わして年程長く。あかく栄えん遊ひ成
る。や百北余存せんく。出

此十五粒光細小むらひ金粒をけりて
細立て程ありはさのぬあうな

此法積十粒
ヨリ候りて
今暫別約月
はあり

治る人あなと第ふ山うり

粒光あり咲

男十六粒八百きり伝る

道人兼元章の筆架成増る。李自三筆筆生花
自是才思日進と銘す。孝是成好く筆の及明
あふはく如文。画以名あり。才明危筆筒成はる。一
一我のまの取法奇なる妙も然いとあみ。程とれ休
の備珠を焼金火紙照し。一つるふ路るまの林成
片らねハ秋も文好。恙。是を爰見ハ宋人富のむ
て世始るそはく。老の春風や。ひ急り家事毛
あふ。一。珠は粒八百ハ奇矣。始恙者ん
死。く。まふ。麻もあふ。ん。筒の中
みは。まの。粒を。新乃。ま。ち。あ。て。あ。ふ。た。あ。ひ。く。ハ

と字を成りて。能因はよみたり。国平を
引く如く此の字をよみたり有る
此の教師は僧破笠老人おすあれ

才十七 椋雪へ返事

法明く土つぎ葱湯り。下へねを。肥を。併細き。鈕の
筋も。又を山樾と。楽の才あふへ。三谷を。あはれと。傳
へたり

山樾是弟
粘是兄
黄曾直

本城の脱く。逆く。縁ぬか。か
あ。不用心と。下。あ。る。城の。字。れ。と。独。笑。深。海
ア。新。ト。ト

才十八 武陽渭北に遣ふ

東可幸。あり。と。六。時。く。信。成。へ。一。比。度。万。白。桃。坊
る。故。あ。く。み。ち。さ。う。と。雪。か。東。福。寺。塔。取。乃。門。小
方。く。一。字。あ。り。是。を。お。き。い。す。と。無。く。と。智。一
聖。一。と。力。く。く。屋。乃。若。楓

才十九 阿みの娘を贖

小山僧都の堂平のありて。そやれ。法。と。あ。り。と。て
光。君。乃。あ。さ。ら。く。ゆ。ふ。ら。ち。ふ。も。只。小。娘。の。事。を
あ。そ。れ。と。す。ら。ぬ。も。識。り。始。め。ぬ。世。の。一

物モノの心ココロと心ココロの志シはあつたぬあふれりや州シマを

才サイ北キタ芭蕉ハクサウ多タ録ロク之ノ論文ロウブン

存ゾン心シン雪セツ元ゲンの句クと粉骨コノボネ又マタ章シヤウ之中ノチウ。心シン生セイ涯エ涯エ周シユウの
上ウヘあふん。真マコト直ナホクて不フ盡シユ之ノ。大ダイ道ドウ意イ乃ノ之ノ哉カ朱シュ英エイ。之ノ文ブン
甚シカニ句ク尤モトモト真マコト確コトワカシ。世セ道ドウの重オモシ宝ホウ。才サイ時ジ危イ殆タイ人ニヒトと加カていさ
らと共ニ平ヘイ心シンとん也ヤ。才サイ子シ道ドウ也ヤ。

之ノ文ブン四シ字ジ之ノ目メ下カ旬シユン平ヘイてそ有アルる

才サイ正セイ雜ザク活カツ

桃モモ徑キョウハ
花ハナハ
尻シラノ子コノ

一ヒト江エ南ナンの桃モモ徑キョウ也ヤ。近チカ年ネン後ゴ庭テイ花ハナ盛セイ不フ僧ソウをさうし俗
を破ヤる事コト目メ不フ痛イタく心ココロ子シ好ヨクわくは拍ハクちり。中ナカ富フ年ネンと云

男オトコ之ノ氣キ燭ソク暫シヤウ時ジを金カネ千セン疋フツの價ネを以ヨリ春ハル霄セウを壓オシたり。世
人ヒト書カキ或アルも價ネとして只ただ世セ老ロウを誇ホウる才サイ活カツ也ヤ。大明ダイメイ律リツ。
云イハレ以ヨリ陰イン莖セイ放ホウ入ニイ人ヒト之ノ糞フン門カド者モノ八ハチ杖シヤウ一イツ百ヒャク

此コノ刑ケイノ放ホウノ字ジ行キョウ要ヤウなりとて放ホウとは可コト理リあり
云イハレ事コト可コト理リ業ギョウをすれハ杖シヤウ一イツ百ヒャクとの義ギ志シくれん
お射イたれん杖シヤウ不フ及キん悟ワむへ一イツ放ホウの字ジと下
其ソノ事コト暫シヤウ時ジ千セン疋フツを具ク圖ズ不フ投テウ者モノ必カナラシ杖シヤウ一イツ千セン道ドウ
其ソノ才サイ活カツ道ドウといふはうむへあり

一イツ平ヘイ先セン年ネン高カウあり名ナう崎サキと云イハレ。死シふおとんでいふ事コトあり是
道ドウの神カミ也ヤ。死シて後ノチ必カナラシ一イツ家カの者モノと云イハレ事コトと云イハレ也ヤ

燕、
時、
各毒、各

おアまをねやぶりのたのみすまるといふ事の口だみさる
と伺へんがもれにまをね也。不のねなりといひ咲て別死
いささか事口く小清行去御方へお話笑談の折や
ア上りまを極て一家子口説あらんその上理の切れさなる
ん。とやう御去を流らまをねん。口古さけて一家和て
むつやううう。その後又笑談ア作りりんと早にねな
らとまをりあけもまをりやありう。不のねま言ある
時、能切字。人お死其言也。昔。東坡う燕、張建
對か時、是はハ方るへー

一言所西谷ふ入て熊坂長範甚社の宝を奪ふの扱。殺
多の盜賊をあつてまをる。長範いへおまひらん橋下
岩上ふ休て。御山の雲おの光を感しるん。寺子入て
黄金を指さし、まをりて四面を拜ス。其はは墓石。誓言ひ云永、
賊徒此御山入。由。後後く御信をたなく志めやう子ね
と後櫃を借つて向ふ處二枚うまて。まを死後のねまひ出
唯今うまをまをるへーらせてお

たうの山まをる。ねまはうくまこのまをねま後れ
強盜長範とまをる。まをるも悟るまをり。まをる
りてそ海む園なりうる

吾答言

春一夜涼よいのうなれん神必昔を痛みの引ぬ
る古今其例多し。常村叢句不恨む人。自他穢
あり。去捨る而已。引へき。弦たなれを異ととも。みねふ

遠うくぬ。家むじう。た。念。一。き。ふ

老をいひの。けり。涙。流。る。ん。と。ま。り。ま。き

才三十七回忌は。始。る。な。ま。句

秀鏡の如し。先考十七回忌。遠志を。物。カ。て。独。吟
の。お。け。誂。子。月。夜。を。ね。く。以。洞。涼。一。句。と。終。る

是。志。る。日。也。ま。ま。も。伴。縁。の。右。左

才三勸進子歌

一。朝。雪。路。果。然。と。て。下。る。ハ。松。原。危。古。く。以
た。り。う。う。ゆ。り。不。ら。あ。く。ま。や。節。を。幸。て。神。の
仰。の。山。流。流。れ。林。を。見。す。て。け。り。あり
暈ハナムケレて。云。通。よ。富。て。書。を。賞。へ。世。子。富。い。と。も。う。回。を
賞。て。用。る。事。あ。う。純。句。中。ま。あ。り。千。鐘。あ。ん。を。賞。
いま。こ。の。富。之。志。う。ハ。あ。れ。と

ふ。く。書。考。る。く。飛。苑。北。橋。何。し。ら

肯。享。保。正。一。年。春。三。月。仲。院

御。照。又

弟。田。真。洞。亭。小。遊。ふ。と。る。家

上畧
おのゝみ
漱平記

ひくろ。西よき速つまきき家梅くおめり。た佳辰こ
わくく上久くれ。くくなくね雪か暖る。くくくく
お井乃夕言。いうてきくふいせ

おれよて成去布して朝乃晴る。あうね
藤紫菊樹乃お世界なり。くく

才廿五 紀別戸田何某三回之一集

又武古志乃暮秋花暖交たり。も世の氣人のあ月の

雪いささひふりけて落るの氣あり。有日月のこ秋よ海

とる。おとよ平交凝して指不現人あり。とはお年よ人の

あうあうくく

後疑々指示
切六人
蕭相國
世家

一二

一二あり秋の存草乃る

面上三年土
まの州又生
老杜

面上三年土。秋風又白ひをくくむ。お山。里芳と人
あうあう

才廿六 書あ平たぐきくお人のまこく。アきく

いお秋のほめ我筆。常き乃る。あうあう。くく

く又恒あり。いそくといひ。そてあうあう。あうあ

の事。えおまふ。九月十三日。とのお平。そあは。あうあ

お道。る跡の志。うく短言。その。方へ。は。く。ア乃

屋。て。あうあ。あうあ。あうあ。あうあ。あうあ。あうあ

おの。あうあ。あうあ。あうあ。あうあ。あうあ。あうあ

文書

〇廿七

せしむるいひ包て。新吾のそりをもいさふく如一言
 二言。海は青は教古く文おも叶ふへ言をいひ終
 せし。佛の心も海はもふをかりに。くさくはを
 を折。島は積めく人波は草もいりや。花の思を
 おとらひ立ッ日も日教まきまら。たさきむつき時由
 ち月影をぬくて。誰りー海は志おく熱る才の
 福おも。まいくすべさ節の人あみたう。福も。かぐらふ
 おとらひ乃草花みつう。むきまいく。目をとぢ終く
 外小傍を伝て。あ。盡る事あー。げぬる。きく蟬乃
 羽の。う。ちく。落き。懐。た。り。とおとらひ。終。り。て。せ。ら。

様中
 去陽
 不意

子といふその。ちさ。成力。あ。と。揮。流。に。存。も。境。界。子
 流。き。く。終。く。あ。く。ま。や。う。や。う。一。終。く。中。子。落。家
 と。別。ら。ハ。一。さ。る。家。壺。子。乃。ま。と。子。を。終。り。て。あ。く。な。ま
 と。ん。ハ。妻。ま。ふ。う。か。ん。あ。お。卯。乃。花。の。洞。と。志。く。み。て。
 神。言。乃。曉。ハ。結。ら。う。一。さ。る。も。又。来。る。友。を。あ。の。見
 み。ん。ち。あ。う。人。ハ。う。う。う。た。誰。れ。地。境。ふ。あ。う。人。あ。う
 は。い。流。神。計。よ。ま。ま。え。ん。と。夜。そ。ん。た。う。き。み。ハ。人。の。う
 き。を。引。流。や。折。如。一。可。孝。め。書。ハ。か。く。空。空。あ
 と。香。編。庵。と。志。く。せ。ら。る。ふ。せ。ん。と。ま。げ。く。て。終。り。た
 傳。る。子。也。終。た。了。命。ふ。ら。う。ん。と。を。み。を。後。流

魂消

予一奇の心。ほこりなく。神心うけ引く。ふたつ
 きふ。をそよらう。たて。おまつ。神心よあ。へ。み。平
 作。ま。洞。如。如。と。阿。く。お。み。る。も。い。ひ。ま。人。あ。ひ。む。ま。ひ。て
 ぬ。お。り。な。孤。灯。ふ。り。て。信。の。ま。ね。も。自。身。ま。く。指。節。て
 障。く。若。来。し。き。る。み。を。後。ま。く。へ。り。返。り。て。ハ。何。と。な
 く。ま。く。せ。し。事。の。中。く。悟。り。ま。く。り。み。沈。ま。れ。と。お。来
 たり。同。也。も

ぬ。平。克。て。お。ま。ひ。く。せ。は。花。松。榴

共を云ひ
 人を世に
 清く其
 をね
 後実又まの
 一格ぬへ

愁をを療しむる平。匿。阿。我。う。一。宗。の。死。を。後。く。
 風を起し。あ。う。成。ま。ひ。く。ふ。夏。ま。花。は。了。地。の。く。ハ。ぬ。ま。日

ハ生キ。月。死。ス。あ。ん。そ。人。の。う。へ。を。也

才七 林外老人へ贈る

茶室因本林外老人。考。ま。茶。ま。遊。て。至。精。至。好。人。と
 柴。芦。を。鼓。く。光。陰。此。年。六。十。之。賀。阿。り。ま。か。ま。を。か。登
 平。別。後。く。六。十。六

亀乃も。成。引。も。飛。井。の。水。如。春

才八 後東亭 泉境只情別業之
濱亭也

後。京。極。秋。風。も。合。日。の。空。も。か。ひ。の。ね。と。あ。い。ま。は。西。平
 り。た。る。な。り。り。り。ば。ま。西。の。海。と。ほ。く。ま。ま。南。運。路。を
 く。長。波。阿。ひ。り。ま。あり。北。平。岸。の。松。連。た。を。ま。あ。む。り

神ノ御霊ハ

伊弉諾ノ御

事ノ御霊也

道返大神ハ

皇門ノ塞マ

寸大神也

柳ノ橋ハ高

榎原也

こく。議のみと海のさげを造ふ事なり。ゆりゆり白雲を

る風の塵汚たれぬ世。いづれもすくなく。あつと。南と指

て。二三声。眉を低き。多平海。信。分て。共平。互不

必。いひ。結ひて。子代と。若ふ。げ。時。風。之。千。景。暫く。破

らるべし。道返の大神。さ。心。を。定。神。之。於是。島。也。唯。唯

島也。崖。之。阜。陸。を。ひ。く。事。也。小。戸。の。橋。遠。き。ふ。あり。也。只。信

各。入。月。を。ぬ。う。り。記。愛。し。朝。日。を。お。り。て。見。神。を。了。ん

あり。其。事。の。首。也。此。品。の。今。平。や。う。海。也。其。時。危。信。風

を。嘗。て。玄。虚。う。よ。の。ま。成。感。し。此。事。も。小。於。ふ。ま。の

危。う。存。り。ハ。暫。時。危。あり。と。操。筋。を。握。一。時。小

四。時。の。勢。を。以。て。嘯。て。盡。お。り。て。外。ス

其。う。く。名。大。星。也。護。之。へ。一。家。富。貴。幸。常。ふ。あり。ん

唯。危。久。た。事。と。表。之。揚。江。之

之。免。保。成。希。子。及。下。院

身。九。門。生。了。人。白。り

夕。立。乃。る。也。希。子。の。い。う。り。也。耶

君。子。乃。過。日。月。乃。融。め。と。一。民。皆。之。感。ん。令

玄虚ハ海ノ
野ノ作者名

雨縮と云ハ
幽林五ノ記
下リ

を更ふよ乃く民皆去き我乃く雷走り雨
をく人を撓む。有なく雨縮。去そちる
乃雪。山く我築く。人皆心我流ひ清味をお
借の神かさ。解より。流士ハゆく。手
あく。あ収。能。流も。海を。市。不。別。く。漢。商
も。茹。子。も。百。合。も。竹。も。川。床。の。皓。菌。を。の。の。小。第。へ。て
水。様。の。折。交。態。遠。小。海。を。く。我。僕。尻。を。言。く。低
く。伏。の。ひ。く。玉。標。干。の。滯。さ。能。波。を。ぬ。さ。き。を
く。強。を。依。り。能。室。八。倍。の。扇。子。白。へ。を。転。く。ら。は
空。く。く。反。照。慧。風。の。也。貴。を。取。る。一。句。を。終。り。て

吉城皓菌
在樓和と云

下く休
玉を
采花物語

きうち子有あ。晴く。益く。怒の字。そく。あ。此。字。
切あ。あ。ま。され。と。凡。言。杜。宇。の。句。子。写。の。字。我。目。あ。不
矢。ひ。別。あ。く。ぬ。う。た。ま。け。山。の。言。け。ま。を。け。ま。を。工。業。ま。り。ま。き
このけ。及。の。中。へ。只。又。予。自。暴。自。弃。の。人。を。撓。む。仍。て。此
句。を。あ。く。ま。と。あ。れ。え。連。家。の。句。不。な。つ。み。く。を。下。り。子。あ。ひ。

才三小野天神を納く跋 紀府

一軸く。我。の。錦。城。下。く。人。岡。次。高。名。清。流。名。皓。盤
逢。久。信。心。も。く。上。新。可。家。作。り。方。傳。其。と。子
就。中。黄。靈。く。御。神。德。常。小。感。く。を。あ。ひ。ぬ。因。以
流。く。紀。府。子。信。宿。く。安。三。之。兩。君。く。句。を。乞。奉

くぬきしんり川かき
雨土花の海草を以
てすききり一りの
高をむきおこし
舟のむらさきみ雨

一
法

五
珠
鼓

鳥
林

友

文貨堂誦諧書目

半時庵淡々文集

前編三冊

出来

同

後編

嗣出

同

菽旬集

全

行脚集東東龜

富天選

出来

押花宴

全

出来

續蛙海

半時菴高判拔書

近刻

寛保二年歲次壬戌十一月望

浪速書肆

浪瀨傳兵衛藏版

心齋橋筋北久太郎町南江入

